

音との対話，自分との対話

——フレッシャーズ・セミナー教育実践報告 その1——

吉 仲 淳

キーワード：「音」「自己」「サウンドスケープ」「聴く」「身体」

I 問題の所在：教育実践報告の理由

1. これまでの経験を振り返って

筆者は、青山学院大学国際交流センター留学生アドバイザーとして、海外留学生に本学での学業の様子や学生生活についてインタビューを行うことがある。

そのインタビューを通して筆者は、日本人学生と海外留学生の大学生活に対する決定的な意識の違いをしばしば感じることがある。

今ここで、このことについて端的に述べることは非常に難しい。しかしあえてその違いを述べるなら、おそらく学習目的とその方向性に対する意識の明確さ、そしてそのバイタリティーの違いとでも言えようか。そのような印象をたびたび受けてしまうのである。

無論、これはただ筆者自身が感じたもの、すなわち主観的なものに過ぎないのであろうし、留学生の中にもそうではない学生(日本人学生とさほど変わらない学生)も確かに存在するのだと考えるのが当然なことである。

しかしながら、やはりそこに見受けられる留学生と日本人学生の学習に対する考え方や姿勢の相違を筆者自身が感じることは事実であり、それは何らかの要因によって日本人学生が持つ弱さであると推測され、これについて問題視せざるを得ないと考えるのである。

たとえば、留学生のインタビューの中で明確なものの一つとして、自分自身の将来に対するビジョンがある。

「将来，...になりたいので留学しました。」

「...のような仕事に就くために，この授業を受けています。」

これらの言葉からも分かるように，留学生は自己実現的な方向性を持って学問に取り組んでいる一方，日本人学生は，実現したい自己を持ち合わせていない(持てない)かのような曖昧な様子やその言動を筆者自身が担当する芸術表現や音楽関連の授業，あるいはアドバイザーグループなどの学内活動において目の当たりにすることが多く，明らかにその違いを感じてしまうのである。

また，筆者自身が留学生としてアメリカに在住していた折，現地で知り合った日本人留学生の中には，ただ留学という時間を費やす自分の居場所を確保するためだけの理由で日本を離れ，フォーカスされない自分自身の学問的興味や自らが選択したのであろう専門分野に戸惑い，たとえばその留学が捗らない理由として，自分自身の持つ外国語の知識の無さだと考えてしまう学生の存在を記憶している。コミュニケーションツールとしての第二外国語に対する努力もそれほど見られないうちに，ただその拙さのためだけに責任転嫁しているようなのである。しかしはたして言語だけがその理由なのであろうか。

それらの日本人留学生と話していくうちに，いくつかの大きな発見があったことを記憶している。

彼らには留学に及んだ理由が主に大きく2つ存在した。それらはなんとも都合の良い自分本位の将来に対する筋書きであるというような印象を受けたのである。

彼らが留学を決意した理由の一つは，日本での大学生活において自分自身が本当にやりたいことを見つけられないまま大学生活を継続する中，学業についての自分に対する十分な評価を得ることができなかったのも，ただその場所(環境)を変えたということ。

もうひとつの理由としては，中身や内容はどうであれ，とりあえず留学という経験をしておけば，他者からの自分に対する評価が高くなる，いわば「箔がつく」という考えであること。

このように留学という環境の中で「自分自身が何を求め、そのために何をすべきか」など、実現したい自己像を自分自身でデザインし具体化しようとする姿は見られなかったのである。すなわち自己なき姿のみが存在したのであろう。特にこれらのようなケースが集まる日本人留学生コミュニティの場合、たとえ自分が学問への興味や人生に対する方向性あるいは将来的なビジョンを持っていたとしても、それについて話し合う時間や空間は存在せず、なかなか話し辛くなってしまうというような状況や雰囲気があったように感じられた。

実際、このように留学を考える学生やそうした学生が集まるようなコミュニティばかりではないこともここで付け加えなければいけないのであろう。しかし問題視すべきものは前述したようなどちらの理由においても、共通して自分の中に見える目標や実現したい自己像というものはどこにも見当たらず、ただそこに存在するものは、他者からの評価に対する依存のみであるということではないだろうか。

これは、おそらく留学であるという特殊な学習環境や生活状況が醸し出す個人的な問題でもなさそうである。

そこで考えられることは、たとえば18歳という同年齢であっても、諸外国の大学生と日本の大学生の間に何か本質的な違いがあるのではないかということである。

外国人学生が自らの将来などと向き合い実現したい自己像をイメージするような良い意味での自己本位的、自己優先的な考え方に対して、コミュニティを最優先としながら、自己を強調せずただ公平性や調和を重んずる日本人学生は、あたかも大学のプログラムなどの所属する体制が自分自身の方向性を決定してくれるかのような期待を持ち、あえて自己決定しない優柔不断な立場を取ってしまうようであるといっても過言ではない様子が窺えるのである。

たとえば筆者が所属する教育学科においてよく見受けられる学生の現状として、教育学科に属する学生であれば当然であるかのように教職課程関連の授業を受講し、疑う余地も無く教員採用試験受験を必然として考えてしまうのである。それとは反対に、教育学科でありながら一般就職を希望する学生は、自分

自身をある意味でアウトローとして捉えてしまい、非常に肩身の狭い思いをしているという感想を何度か耳にしたことがある。

本来、大学生活というものはあこがれや夢などの自己実現すべき像に向かって自己が尊重され、自由な発想を持って「学業」という学生としての営みを育むことで、自分自身の人生において最も大切な時間を紡ぎだすことが理想とされるのであろう。しかし自己不在で主体的でない学習の様子も少なくはなく、学ぶ意欲や健康的な動機づけのある前向きな学習姿勢に欠けており、自己実現したい像をイメージできない学生が多く見受けられるのが現実なのである。

要するに、自分自身のための判断に際して、はたして自分自身の中に決定する基準が存在するのか。自分のことでありながら判断基準はおろか決定すべきものも他者から与えられ、それに対して従順な態度や決断を下してしまうのではないかということである。

2. 教育における今日的な問題とその状況

今日、わが国は18歳人口の減少期であるとされ、大学では学生数の確保が困難を極める状況となっている。そのため大学では、学生を集めるための様々な取り組みがなされているようである。その対策として、今日の社会的・文化的課題などを網羅し、新たな視座を提供する教育プログラムの展開や特色ある教育サービスまたは学生生活支援などが挙げられている。

また現代における学問領域は、間領域的、または学際的な領域を含む専門領域の細分化によって拡充の一途を遂げ、それを受けて各大学では独自性や特色を出すべく様々な領域の新学部・新学科が構想、設置開設されるなど、活発な動きが見られる。

また近年、大学はFDや授業評価などを始めとする教育改革が盛んに行われているようである。無論、大学での当事者は、教育を受ける学生であることは言うまでもなく、我々教員や事務職員、そして大学という枠組みを含むものすべては、日々学生をサポートする役割なのであろう。しかしこれらの教育改革の矛先が一体どちらに向いているのか？ 誰の為に、何の為に行われているの

か？ 進行しているのか？ 退行しているのか？ 現在の学生の様子を垣間見るにつけ、このような混沌とした状況を実感してしまうのも事実なのである。

このような混沌とした状況を考えるとき、大学は、その主体的な目的意識を持たないまま進学してきた学生を受け入れざるを得ない現実があることに対してそれを問題と認識しつつも、為す術をもっていないという現実があるということ。そして大学教育の当事者である学生自身も同様に、主体的でない自分を自覚しながらも為す術がなく、無意識のうちに自分自身流されるが如く時間を費やすという現実がそこにあるのも確かなことである。

このように大学は、想定した以上に多様化する学生の現状を受け入れざるを得なくなっている。入試形態の多様化により様々な学力レベルや学習動機、学習目的など質的にこれまでとは違った学生を受け入れる状況へと変化しているのである。そういった状況下で大学進学率は微妙な動きを示している。

例えば日本における高等教育への進学率は、他の OECD 諸国と比べて特段高いわけではない。学部レベルへの進学率は42%で、OECD 平均53%より低く、短大レベルでは31%と平均の16%を上回っている。また学部レベルへの進学率を男女別で見ると、男子は48%と平均の47%をやや上回っているが、女子は35%で平均の57%を大きく下回っている。

しかしこのように高くもなければ低くもない日本の大学進学率ではあるのだが、大学中退率を見てみると、日本は11%と他の OECD 諸国と比べてはるかに低いという調査結果が出ているのである。

理由は様々に考えられるであろう。たとえば「やりたいことがあっても、まず卒業してから…」と考える日本人学生が多いのに加え、あらかじめ親などが当たり前のようにお膳立てした学費などの、ある意味慣習化されてしまった教育の経済的支援やその環境設定のために「自分の夢より親(他者)の期待」を優先するべく、自分自身の人生でありながら消極的にならざるを得ない状況が考えられる。そこには自己決定やその後の責任を感じながら重要な決断を迫られるような局面をしっかりと受け止めようとはせず、あえてその状況から逃避

してしまう結果、自分自身が独立した状態にはならない(なれない)こと。すなわち学問をやらされているという構造を作り出したことによって自己が不在化され、自分自身の在り方やその方向性を見失う結果となったのではないだろうか。

それとは反対に、筆者が留学時に出会った学生(日本人でない学生)の中には、自分の進むべき方向を見つけるや否や新たな目標に向かって進むため、それまでの生活にピリオドを打ち、たとえば所属していた大学のプログラムやデパートメントを退学したり、あるいは現時点で就いている職を辞退するような者も少なくなかったことを記憶している。

筆者の留学先であったアメリカでは、自分自身がやりたいことを後押しし具体化するためのサポート制度、たとえば学習環境を変えるためのトランスファー(転校・転学)制度やそれを支える取得単位換算やそのほかのシステムなどに関しても進んでいることは無論確かなことであるが、はたしてそれだけなのであろうか。

わが国では、大学生活は高校卒業後 18 歳からの 4 年間であるという妙なモデルと、その後の就職においても採用試験を受けるなら大学卒、学位取得が当たり前とされるのも事実である。ひと昔前、「大学は、時間を買うところ」とよく耳にしたが、その時代に感じられたような、ゆとりをもって自分探しの旅に出る為に自分自身が所属し所有できる時間や空間を買うのではもうなさそうなのである。ただ卒業というタイムリミットの中での学位取得を優先することから、現代の日本人学生が持つ自己不在で受動的、消極的な大学に対する考え方が見え隠れしていると思われる。

II 本教育実践報告における目的および方法

本教育実践報告は、「教育実践報告その 1」と「教育実践報告その 2」の 2 つに分けて報告を行うこととする。

まず「教育実践報告その 1」において、前述のような今日的問題を認識した上で 2004 年から 3 年間にわたって行われてきた筆者自身が担当するフレッシュ・セミナー(サウンドスケープ: 音との対話 自分との対話)の概要やそ

の目的及び方法、また本講座を進めるにあたってのテーマとなるものや、その背景的理论を再考する。

そして「教育実践報告その2」では、これまでの授業記録(エピソード)や学生が提出した課題などをもとに本講座における教育実践内容を報告し、受講学生の授業内での取り組みを通して、現代の学生がどのように自己不在化され方向性を見失っているかという現実を受け止めながら、本講座においてどのように学生とのかかわりを持ってきたのか、そして持つべきなのか、また学生自身はどのような関わりを求め、何を必要としているのかなどを分析、考察する。

その考察をもとに、今日の高等教育機関における初年次教育の意義やその在り方についても検討したい。

III 教育実践報告

1. フレッシュヤーズ・セミナー：初年次教育としての全学的取り組み

(1) 「青山スタンダード科目」の概要

本学における特色ある教育カリキュラムの一つとして「青山スタンダード科目」がある。通称「青スタ」として学生にも親しまれているこの科目群は、フレッシュヤーズ・セミナー、コア科目、テーマ別科目の3つに区分され、2003年度より全学共通の教養教育として開講され、専門教育とのつながりをこれまで以上に密接なものとすることを目的とした。専門教育における専門科目がツリー(樹状)型カリキュラムに対して、この青山スタンダード科目はいわばリゾーム(根茎)型カリキュラムとして位置づけられ、各学部・学科における専門教育への誘い、いわば橋渡しの役割を担うべく開講されている。それぞれの科目を結ぶ鍵概念は「自己」とされ、その目標を「どの学部・学科を卒業したかにかかわらず、一定の水準の技術・能力と一定の範囲の知識・教養を備えているという社会的評価をうけること」としている。

(2) フレッシュヤーズ・セミナーの位置づけ

その「青山スタンダード科目」の一つであるフレッシュヤーズ・セミナーは、

音との対話，自分との対話

前述したリゾーム型として3つに区分されている中でも最も導入とされるものであり，一年次配置，すなわち本学における初年次教育の一環として開講されているものである。

このフレッシュャーズ・セミナーは，47種類ものテーマによる講義が配置されており，様々な学問分野において研究活動を展開する専任教員が20名ほどのフレッシュャー(一年次学生)とセミナー(演習)形式を採っている。そして，授業担当者と受講生による双方向なやりとりの中から育まれる主体的，意欲的なかわりとその姿勢，授業内でのディスカッションなどを通して試行錯誤する中で期待される問題意識の提示や問題解決能力及び様々なメディアを用いた表現技法などの獲得を目指すものとしている。すなわち，各専門分野に入っていく際，必ずといっていいほど必要となる「学問的な作法」を身につけるためのものであり，専門的演習の低年齢化されたものではない。一つのテーマについて，様々な学部・学科生がそれぞれの視点によってディスカッションすること。他者と同じであることを前提とするばかりではなく，他者との相違に気づくことにより専門領域の壁などを越えてやりとりをすることで多面的，多角的に分析する知性を養い，自分自身により本質を見極めることのできる力を育成することなどが目標とされている。

ここで，筆者が2004年度より担当するフレッシュャーズ・セミナー(サウンドスケープ：音との対話，自分との対話)の概要および授業目的やその方法などを報告する。

2. 本講座フレッシュャーズ・セミナー(サウンドスケープ：音との対話，自分との対話)の教育実践報告

(1) 学期配置

本講義は，後期(金曜日3時限)に配置されており，通常12,3回ほどの授業回数により完結される。

後期という時期は，例年学内において相模原祭や点火祭などが挙行され，活動的かつムードあふれる変化に富んだ時期でもある。また一般的にはクリスマス

スをはじめ、師走にむかって街は鮮やかに彩られ、忙しさの中にも活気溢れる雰囲気期待される時期でもある。特に秋から冬への季節の移行は、光や風、温度など気候の変化をはじめ樹木や草木などの色彩など、ランドスケープにおいても様々な変化をもたらすだけでなく、人間にとってもそれらの変化が視覚や触覚などを通して感覚的に刺激を受け活性化するのである。様々な現象により季節の移ろいを深く感じる季節であろう。

サウンドスケープも当然、例外ではない。聴覚を通してその季節を感じることが可能であり、バラエティーに富んだ変化を感じさせてくれる音の時期でもあると同時に、たとえばクリスマスソングのようにこの時期にしか聴くことのない音楽や音をみつけることができる。

このように、自然環境としても文化的環境においても変化に富んだ時期に本講座は設定し、学習内容もそれに沿ったものとしている。

(2) 学習環境

学生が持つこの講座の印象として、音全般をテーマとする講座というよりはどちらかといえば、学問や文化としての音楽がテーマであるかのように捉えがちである。

相模原キャンパスでは、音楽関連の講座のためにピアノが設置された中教室 E-106 (音楽理論で使用)をはじめ、O 棟(実験や実習などに使用)にある器楽レッスンで使用する器楽練習室など様々な教室を配備されているのであるが、本講座では、あえてピアノが設置されているような音楽教室などを意図的に使用していない。

過去3年間の使用教室としては、一般教室: B-417 (2007年度より F-302)を使用している。教室に設置された機器としては、CD や DVD, VHS プレイヤーなどの AV 機器とプロジェクターであり、通常の講座で用いる学習環境と比べても違いはない。

これは授業の内容とも関係するだが、本講座において受講生は授業時間内に録音機材を用い、学内の音を採取する活動(フィールド・レコーディング)など

をたびたび行っている。それ以外にもさまざまな音に関する実験などを教室内外で行うことがある。したがって、座学的に講義として行うための教室という学習環境にとどまらず、相模原キャンパスそのものが本講座の教室であるといっても大げさなことではない。

学習環境の設定は、本講座を進めるに当たっての最重要課題の一つであるとともに受講学生の学びに対し、直接的に関係する事柄であると考えている。

これまでの学習経験(小、中、高での)は、受講学生にとって新たな課題を持って学ぼうとする身体を準備する目安となる。学びの準備として、前もって得た授業のイメージと共に、テーマに沿った身体を事前に備えることは最も重要なことではあるのだが、特に現代の学生にとって、経験により与えられたイメージは固定観念となり、学ぶ姿勢やスタンス、ルールまでも構成し、自分自身と共にあるべき身体をもその観念によって操作する(される)こととなり、自分の活動やその表現の幅を狭めることとなりかねない。この意味からも、学習環境の設定には注意深く行うこととしており、あえて特徴のない教室を使用することで、学生の固定観念を呼び覚ますような一般的音楽色が濃い環境を採用しないこととした。そして、特に受講学生が、これまでの学習経験によって与えられた教科としての音楽が持つ専門技量に対する固定観念やその中にある取り組み難さや怖さを取り除き、個々の生活の中から音本来の存在を捉えることとし、音あるいは音楽に対する新たな視座を模索することを前提としているのである。

学習環境については、使用教室だけにとどまらず授業で扱う音や音楽ジャンルなど使用教材について考慮するほか、人的環境として役割を担う担当教員(筆者)の在り方、たとえば言葉がけや立ち振る舞いなど、学びの空間を構成する全てを包括し環境を設定する配慮を行っている。

このことは、教育実践研究その2において、学生との授業内での関わりなどのエピソードとともに詳細に報告したい。

(3) 受講学生：所属学部・学科

受講学生は、例年 20 名の 1 年生である。

受講学生の所属に関して筆者が例年受ける印象なのだが、本講座を受講する学生は、担当教員(筆者)の所属する学科とは異なる学生がほとんどである。

やはり全学的にも共通とされる教養教育の一環であるという理由からなのか、それとも前にも述べたように、様々な専攻において様々な考えを持つ学生たちの集まる場という理由であるのか定かではない。事実これまでに筆者と同じ教育学科所属学生の受講は、過去 3 年間で 2 名のみであった。しかしその選択方法にはまったく意図はなく、受講生の決定は Web 登録による抽選により無作為に行われているのである。例年、本講座においては理工学部や経済学部、経営学部の学生など、普段かかわりの少ない学生が多く受講している印象が強く感じられる。

(4) 受講学生：生活環境、家庭環境

授業時間内において、受講学生自身の生活環境における様々な音を振り返り文章化するという課題をしばしば与えることがある。もちろんそこには音や音楽に対する学生の考え方がちりばめられているのだが、それ以上に注目すべき点は、そこに学生理解を深めるための重要な情報がたくさん潜んでいるということである。

詳細は教育実践報告その 2 において明らかにしたいが、たとえば受講生のほとんどは自宅からの通学であり、家族とともに暮らしている。受講学生の中には、毎年 2, 3 名の地方出身学生がおり、その全てがアパートマンションでの一人暮らしであった。

ここで、授業におけるやりとりの中で、学生とのかかわりのヒントとなるようなエピソードを紹介したい。(担当者による授業記録から)

エピソード：フレッシュャーズ・セミナー第3回での質問

日時：2004 年 10 月 22 日（金）第 3 時限

音との対話、自分との対話

場所：D-417 教室

天候：くもり

—授業の経緯—

本講座が始まり、3 回目の授業である。若干、まだ学生は固く、やりとりとしても表面的でぎこちない様子である。テキストである『サウンドエデュケーション』の中から 78 番 (pp 112) の課題にある「昔あった音で、今現在は聴かれなくなった音は？」という質問をしている。

(以下、担当者：T 学生：A)

T：「みなさんが小さいころにあったけれど、今は消えてしまった音はたくさんありました。じゃあ、新しい音はどう？ これから将来的に出てくるであろう音なんかを想像するのもおもしろいことなんだけど、みなさんにとっての新しい音、最近出てきたと思われる音はなんだろう？ そして、その音はどう思いますか？」

学生の何人かに、こちらから指名し話してもらったあとで、学生 A が自ら挙手をする。

A：「炊飯器の音。とっても寂しい音... 独りなんだ一っで感じさせる... この音であらためて家族の存在や親のありがたさを知りました。」

学生の中には通学できる距離圏内に家族が生活しているにもかかわらず、キャンパス近くに部屋を借り、一人暮らしをしている学生もいる。

受講学生のほとんどは音楽に対する興味、関心が高く、幼少時からの音楽教室などでの習い事、あるいは中学・高校時での合唱や管弦楽などのクラブ活動や友人とのバンド演奏活動など様々なものがあり、複数の音楽経験を有する学生も多数いた。中には親が音楽家であるというような音楽的環境の中で育った学生もいた。学生の何人かは、海外在住経験などもあり、日本とは異なる生活や文化を体験したことについて課題の中で述べている。

このように彼らのほとんどは、経済的にも文化的にも比較的裕福な家庭に育っている様子が窺われる。

(5) 講義概要

年度始めに学生へ配布される「講義内容」では、本講座の説明として次のように書かれている。

これは、受講学生が前もってこの講座に対するイメージを膨らませながらその学びのための身体を準備する材料として重要な情報の一つなのである。

(2007年度青山スタンダード 講義内容より)

【講義題目】

サウンドスケープ：音との対話，自分との対話

【講義概要】

人間の生活，あるいは生きるということには、音との関係を無視することは出来ません。みんな音をだしているのです。人間だけではありません。生物といわれるものすべてにおいて、音とかかわっているのでしょうか。無論、私たちの音とのかかわりにおいては、音を発するだけではありません。音に関わるときのスタンスとして、私たちは、1.音を発する。2.音を聴取する。という2種類の主なものがあります。しかし音というメディアを考えると、はたしてこれだけでしょうか。単に、物理的な情報を授受するだけが、音との付き合い方ではなさそうです。

私たちにとって、音を聴くということはどういうことなのでしょう。共感覚者などを除けば、一般的に音は視覚を通しての存在感がありません。音を出したあとの物質的なシェーブや色などは感じられませんが、発信者、受信者共に何かしらの感覚が残ります。音は、帰属性が高く、音源(音の発生源)を特定しやすい性格があります。そして、音をだすものの性格や機能、職種までも表現してみたり、あるいは音を聴取する者に概念やルールを提供します。とにかく音が存在するという事は、目で見ることのできない生物がそこに息づくかのように環境を構成し、様々な影響を与えたりするのでしょうか。

このセミナーは、音に対する私たちの挑戦です。いったい、どれほどの音を聴取できるか？音というものについて改めて考えると同時に、その音環境で生活する私たちについて見つめ直す音の実験室です。音を集めたり、音を作ったりしましょう。そして、自分の感覚を持って音を聴取することにより、生(生きること)に対する肯定感を実感しましょう。

【成績評価方法】

出席、授業中の発言、課題の取り組み、提出を考慮します。

【教科書】

R・マリー・シェーファー著 鳥越けい子他訳『サウンドエデュケーション』春秋社

(6) 本講座におけるテーマと方法

—本講座のテーマ—

本講座は、講義題目にもあるように「音」をテーマとするものだが、そのテーマを探究する方法であり、もうひとつのテーマとも言えるものとして考えられるものが「聴く」という行為そのものである。

人間にとって耳は、目のように閉じることが出来ない部分であり、生まれてから死にいたるまで機能し続けるものであるのだろう。言葉を変えていうならば、耳は人間が生を与えられるや否や直ちに音の世界を開国し、生きるという確認できる限りその状態を持続し、生きるために世界への扉を開けているのである。認識しているか否かは別問題として、音はそこにあるといえる。

成人後、事故がきっかけで聴覚の中途障害を負い、その後、音のない世界での経験を著した書物『失聴：豊かな世界の発見』の中で、著者であるハンナ・メーカーは「音声は存在する。もうずっと前に、わたしはそう考えることにした。この耳が音の存在を伝えてこようがこまいが」と述べている。

しかしそれにもかかわらず、生活において音と対峙する際の「聴く」という行為には「集中的聴取」と「周辺の聴取」というものがあるように、人間は自然に(無意識に)その世界に対し、耳を傾ける音と傾けない音に分けているのも確かである。しかしながら音は、聴く聴かないにかかわらず、本来そこに存在するはずのものなのである。

アメリカの現代作曲家ケージ(Cage, John: 1912~1992)は、自らの著書『サイレンス』の中で興味深い経験を紹介している。

「私は数年前、ハーバード大学の無響室に入って、一つは高く、もう一つは低い、二つの音を聴いた。そのことを担当のエンジニアに言うと、高い方は私の神経系統が働いている音で、低い方は血液が循環している音だ、と教えてくれた。私が死ぬまで音は鳴っている。そして、死んでからも音は鳴り続けるだろう。音楽の未来について恐れる必要はない」

音とは何か。そして聴くということはどんな意味があるのかを自分自身の生

活の中から振り返り、その経験を通してあらためて認識を深めるということを本講座の目的とした。そしてそのことを考慮し「サウンドスケープ」という考え方を取り入れたのである。

—方法：サウンドスケープ—

講義題目にある「サウンドスケープ：soundscape」とは、「音：sound」と「風景：landscape」を合成した「音風景」という意味で捉えられている造語である。この言葉及び考え方は、カナダの作曲家であり音楽教育家であるマリー・シェーファー（R. Murray Schafer）が自身の音楽実践から考案したものである。

今日、この「サウンドスケープ」という考え方は、音楽にとどまらず様々な分野の研究者及び実践家に影響を与えている概念とされる。たとえば、動物の出す音によって生活環境やその動線を分析する生物音響学者のクラウス（Bernie Krause）は、分子生物学者の福岡伸一氏（本学理工学部教授）との対談インタビューの中で、「サウンドスケープは、ランドスケープの対概念である。我々が世界を見るとき、そこに構造を見出せるのと同じように、音にもその構造を見出せることが出来る。それは生態学的構造と呼べるものである。」と語っている。このように、「ランドスケープ」から派生した造語とされていた考え方も、その範疇を超え今や様々な領域の研究者などによって拡張され、発展を遂げているのである。

本講座のテキストは、その「サウンドスケープ」という概念を考案したマリー・シェーファーの著書である『サウンドエデュケーション』を用いている。

この書籍は、マリー・シェーファー自らの音楽教育実践や音環境の調査研究の中から生み出した様々な課題を100の質問にまとめた課題集である。それはおもに生活に関係する音にまつわる質問「あなたの人生で一番心に残った音は?」「目覚めてはじめて聴いた音は?」など様々である。

著者であるマリー・シェーファーはこの書物について「私はこれを“イヤ・クリーニング”（耳掃除）の課題集とでも呼びたいと思う。」と、本書序章

の中で述べている。

音楽言語と身体 (Aural: 聴覚) の関係を深め、音楽技能を高めることを理想とする音楽基礎教育の一つとしてソルフージュ (Solfege) というものがある。それは時折“イヤー・トレーニング”との愛称で呼ばれるのであるが、マリー・シェーファーのいう“イヤー・クリーニング”とは、まさに“イヤー・トレーニング”という現代における言語操作的技術偏重型の音楽教育方法を象徴するこの言葉にジョークをもって新たな提案をしたものに違いない。

(7) 本講座の目的とその背景的理論

一般的に音楽関連の講座においての目的として、たとえば音楽の美しさやその奥深さ、またそれを支える音楽史や文化を学ぶこと。あるいは音楽理解を深める知識、演奏方法や技術の習得など、様々な方向性によって考え設定できるのであろう。

しかし本講座では、特に“音楽としての音楽の講座”ではなく、今まで受けてきたであろう学校教育における教科としての音楽授業とは違うようなテーマや目的をあえて掲げることとしている。

それは、はじめに記したような今日の問題に直面する担当者(筆者)が、受講学生に与える課題(本講座の目的を達成するための)であり、それに向き合うことにより学生自身が様々なパラダイム転換を図ることを期待し、大学における自主的な学びをより有効に進める理想像を育むための提案となるのである。

—パラダイム転換 その1: 音楽から音への意識—

この“耳掃除の課題集”『サウンドエデュケーション』は、一連の音楽教育書とは明確に一線を画くところが感じられる。たとえ同じような課題やその活動が存在したとしても、「音楽」という文化の中の一つとして問うものであるのか、「音」という切り口から人間の生活・文化全体を問うものであるのかという違いがある。

もう一つは、「音楽」の存在を認識し、その理解を深めるために「音」本来の

存在を再認識すること。そして本講座のテーマとして掲げる「聴く」という行為の位置づけであろう。

ケージの著書『サイレンス』の中で、本講座にとってまさに重要とされる記述がある。

「音楽を作曲する目的は何か...それは生の肯定である。それは混沌から秩序を引き出そうとか、創造に何らかのより優れた技法を提起することではなく、ただわれわれが生きているまさにその生活そのものに目覚めさせようとする試みである」

このケージの言葉を借りるなら、まさに「聴く」という行為の目的は生の肯定、生きるという確認。もっと言えば、人間として生きるための挑戦なのではないだろうか。

本講座で用いるこの課題集『サウンドエデュケーション』は、「聴く」という行為に私たちが忘れかけている本来の在り方やその意味、そして音を「聴く」ことを認識することにより拓かれる豊かな世界の存在を示しているのである。

それは、人間を始めとする動物本来が持ち合わせる聴覚を通じて、一学問領域としての美学「音楽の美学」から人間の生の証ともいえる「聴覚の美学」へと拡大し、日常の生活全般に対する意識の拡大、そしてそこから得ることのできる「生活の美学」へのパラダイム転換が図られただけでなく、たとえば「音楽教育」から「環境教育」あるいは「社会教育」への拡張や学際的領域の誕生をも意味することとなる。

—パラダイム転換 その2: 関係性の変容のなかで—

この音楽に関する新しい理念「サウンドスケープ」の背景として、現代社会と表現する人間との関係性があると考ええる。

現代社会において、人間の諸感覚の中でも視覚から得る情報が現実性のあるものとして捉えがちである。味覚や嗅覚、触覚や聴覚などは主観的要素が濃い、いわば個人的な感覚であり、視覚と比べると他者との共有や共感が難しく感じ

られる。

たとえばそれまで触覚とともに存在していたとされる視覚は、ルネッサンス期以降、切り離された形で独立し、そのことにより価値判断などの変化が起こったとされる。それは視覚と触覚の二つの感覚が寄り添って存在していたことで対象物との距離を感じない時代から、二つの感覚が切り離され、対象物との距離感が明確に感じられるなかで対象化され、同時にその関係性や存在の捉え方にも変化を遂げた。それは対象を「もの」として捉えながら一定の距離を保ち観察するという行為によって、他の感覚から得る情報に左右されることなく、ありのままを描写する。そして色彩や構図の美しさを他者と共有することが可能となる美しさのお手本、美に対する概念を確立したのである。

対象物に対する情報を単一の感覚のみに委ねることによって、より客観的、普遍的なものを構成したのである。そして常にその裏づけとして言語が補足するという役割を担っていた。

距離と方向性を明確にすることで、たとえば「見るもの」と「見られるもの」に対象化され、その関係性として「見るもの」は「見られるもの」を支配し物体化することで客観性や論理性の確保に努めてきた。

音の世界に関しても同様に、様々な事柄を近代科学によって解明したようである。しかしながら音本来の存在と人間の身体との間に距離や方向性が明確に感じられようになると音は人間にとって客体化されるとともに「聴く」という行為も変化してしまったのである。結果、現代における音の世界はとても狭いものとなり、音に対するイマジネーションや創造性は失われてしまったことは事実であり、それは今日の音楽教育実践からも見て取れる。

西洋近代における自然科学の確立は、たとえば芸術表現における感じるというような主観的な行為においても、距離感や相互の対象化という規格のようなものを持ち込み、知らず知らずのうちにルールを構成し、その表現においてマニュアル化を行ってしまったのではないだろうか。

このような視覚中心の西洋近代文明に対する反省とそれに伴う聴覚文化の復権といったマクルーハン (McLuhan, Mashall: 1911~1980) やオング (Ong,

Walter) などのコミュニケーション理論などのような音楽以外の領域からの影響も多分に受けている。

「聴くことは離れたものに触れるひとつの方法である」

これはマリー・シェーファールの言葉であるが、まさに視覚が触覚とともにあった時代に回帰できるヒントがここにあるのではないだろうか。

—パラダイム転換 その3: 芸術的表現に対する固定観念—

現代において、芸術作品や芸術的表現に対する認識やその印象は、たとえば美術館や演奏会などの限定された空間において確認できるものだけが芸術的に崇高なものであり価値があるかのように感じてしまうということではないだろうか。

その芸術との関係性の中で出来てしまった距離を縮めるためであるのかどうか理由は定かではないが、今日進歩を遂げるコンピューターメディアネットワークによって音楽や美術などの作品が配信され、いつでも何度でも閲覧や視聴が可能となり、手軽で身近にも感じられるようになった。

しかしその利便性を優先するあまり、作品自体が持つ躍動感など「肌に触れる」というような主体的に身体を通して感じるというプロセスが制限あるいは排除されたのも事実である。

いずれにしても作品と自分自身とのあいだに距離ができてしまい、芸術作品を味わうという本来的な意味を履き違える結果となっているようである。そのため作品の存在自体を感じることなく、たとえば「きれい」「きたない」や「良い」「悪い」などの、あたかも前もって感じ方の基準が決められたような感想を述べる程度になってしまう。結果として、すでに自分自身と芸術作品の関係は希薄であり、芸術の世界が自分とは切り離された非日常的なものであると捉えてしまうのである。自分自身にとって遠く離れた未知の世界である芸術を把握し他者との共有を目的とする手立てとして一般的評価基準となる知識や技能、すなわちマニュアルらしきものが必要になってしまうのであろう。その評価を

するための方法となる知識や技能が獲得されず従うことができないならば、一般的な理解は望めないと認識され他者からの評価を受けてしまう。その構造が芸術と自分自身の距離を一層広げることとなる。

その結果、この関係性を継続することは芸術そのものを形骸化させ、衰退させることは否めないのである。

音楽の歴史の中で一種の事件ともされた作品がある。音楽あるいは芸術本来の在り方について新たな視座を提案することにより、大きな衝撃を与えた作品がある。それはケージ作曲『四分三十三秒』である。

この楽曲には、I, II, III と表記された三楽章があり、各楽章には「tacet」という楽語により演奏方法が表されている。演奏に際しての注意書きには、この作品がどのような楽器で、どのような時間の長さによって演奏されても良いと記されている。曲中にある「tacet」とは、通常オーケストラ演奏の際に、パート譜の中で頻繁に使用される表記である。その意味としては、その言葉が表記された部分(長い単位の楽曲の部分：フレーズやセクション等)では、奏者は何もしないということを指示するものであるため、この楽曲に関していうならば、三楽章全てにおいて音を出さないことがこの楽曲の内容とされているのである。

この曲は、1952年8月、ウッドストックにてピアニストであり現代作曲家でもあるデヴィッド・チュードアにより初演されたのだが、彼は演奏後、「もっとも強烈的な聴取体験だった」と語った。この時、チュードアはすでに演奏家(演奏をしない)ではなく、舞台上に立ちながら客席から流れ出る様々な音を聴取するもう一人の聴衆であったのだ。

音符を用いるような音楽の伝統的な記譜を排除し「音楽は音を奏でるもの」という概念を覆した。コンサートで通常行われているような「静かな中で音楽に耳を傾ける」というものから、演奏会で当たり前のように期待される音楽が出現しないことから際立たされたそれ以外の音に耳を傾けることを要求したのである。

まさにそれまで当たり前のように存在していた「作曲」「演奏」「聴取」とい

う関係について問い直されることとなったのである。

わが国における音楽教育は明治以降、西洋文化と共に西洋音楽を基本とする教育体系が導入され、その後もただ追従してきた。英語で「music」というように、ヨーロッパを中心とする西洋文化の代表として音楽は、複数形を持たない唯一のものとされ、民俗音楽やポピュラー音楽などその他の音楽を長く受け入れなかった経緯がある。まさにその流れを受け、わが国でも音楽教育がなされていたのである。

しかし今日、ケージなどの芸術活動などを始め、様々な領域における音楽研究の成果などにより間領域的な考えや新たな芸術表現形態などにも理解を深めていくこととなった。そして、特にそれまで西洋音楽(特にクラシック音楽)が主流であった音楽界も、異なる文化価値を是認する文化的相対主義の考え方が顕著となってきた。音楽とは唯一、西洋音楽であるとされてきた“ミュージック”(music)の時代から、それ以外の音楽をもすべて包括する“ミュージックス”(musics)への時代の到来を促した。

ちなみに音楽教育においても、音楽全体、その他の芸術領域をも孕んだパラダイム転換の余波が影響を及ぼしているのはたしかであり、少しずつではあるが着実に変化を遂げており、“ミュージックス”の時代の到来を感じさせるのである。

世界において自分とは違うものを把握し受容しようとする事、そして様々な表現を認識し理解することは表現力そのものを育むことであり、他者理解こそが自分を識(し)る手立てとなるのであろう。

3. おわりに

この担当するフレッシュャーズ・セミナーの開講時期である後期が近づくにつれ、毎年の如くではあるのだが、青山スタンダード科目の説明書きにあるあの文章が徐々に気になってくる。それは、以下の件(くだり)である。

“それぞれの科目を結ぶ鍵概念は「自己」とされ、その目標をどの学部・学科を卒業したかにかかわらず、一定の水準の技術・能力と一定の範囲の知識・教養を備えているという社会的評価をうけること”

キーワードは「自己」であり、一体どんなことを学生に伝えれば、本学独自のスタンダードとなり得るのだろうか。もちろん手立ては音(音楽)である。

おそらくそれは、学生がより高度な知識や技能を獲得するためにその段階や時期を考慮せず、ただ高い専門性を前倒して教え伝えるようなことでは決してなく、これから希望を持って張りめぐらされる学びという枝葉を支える為のリゾームを育む土壌をまず耕すこと。それがこのフレッシュャーズ・セミナーを担当する者のミッションではないかと思ってやまないのである。

それはまさに知識や技能を健康的に搭載できる身体そのものの育みとなって、自己理解、ひいては他者理解へと誘うのではないだろうか。

しかしながら、人生において一度身についた(何かによってつけられた)感覚や固定観念などを取り除いたり、または自己が不在であるような学生を奮起させるということは、今日の教育実践において、まことに困難なことではある。

しかしそれらに変化を与えるためのヒントは、やはりその身体そのものであり、個々に持つ身体やその感覚への意識が問題解決の糸口になると考える。

学生一人一人が独自の感覚を持って自分を見つめなおすことにより、自分の身体に対し「これは自分である」という認識とともに愛着を持ち、その身体を取り巻き、影響を与え続けている環境についても再認識することが重要とされるのではないだろうか。無論このことは担当である私(筆者)にも言えることである。

目には見えない「音」というものから身体性を育む取り組みや、一方的ではない双方向による教育的ななかかわりの中から、学生自身による気づきを期待するところなのである。

参考文献

R・マリー・シェーファー(1992)『サウンドエデュケーション』春秋社

ジョン・ケージ(1961)『サイレンス』水声社

ハンナ・メーカー(1994)『失聴：豊かな世界の発見』昌文社

マイケル・ナイマン(1974)『実験音楽：ケージとその後』水声社

佐々木 敦(2001)『テクノイズ・マテリアリズム』青土社

吉仲 淳(2007)「教員養成のための音楽指導から見える本来的な音楽の意義について
の一考察 その1—青山学院大学における教員養成を目的とした音楽関連科目の在り
方について—」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第51号